長期入院中の統合失調症をもつ人のストレングスに焦点を当てた地域生活への移行に向けた看護援助

2017 年

千葉大学大学院看護学研究科

小坂　恵美

論文内容の要約

わが国の精神医療は、新規の入院患者の場合は、8 割以上が 1 年以内に退院できるようになったが、一方で入院期間が 1 年以上の退院者数は急激に減少している。またこのような長期入院患者の退院先は他病院への転院の場合が最も多く、その傾向は在院期間と比例している。疾患別では、統合失調症をもつ人が最も多い。このことから、精神疾患を持った長期入院患者は、地域で生活することが困難な状況にある（厚生労働省，2009）。

地域生活は、家族や仕事場の同僚、友人、外出先で出会う人など、周囲の人たちとさまざまな関係を築きながら、日常の楽しみや目標をもって生活していくことであり（Rapp, 2008 : Saleebey, 2009）、精神障害の重さや周囲の環境などの理由によって地域生活が困難とみなされていた長期入院患者が地域で生活できるためには、入院中から地域生活に向けた目標や生きがいを見いだし、環境の中から活用可能な社会資源を探り、それと本人の内在するストレングスを活用・発揮しながら退院後の生活を実現することが必要である。

社会福祉分野の Rapp らは、機会や社会資源などの環境のストレングスと本人に内在しているストレングスに焦点を当てた援助を開発し、精神障害をもつ人の地域生活の質を高める上で重要な役割を果たしている。本研究は、長期入院により自分のストレングスを活用する機会の少ない統合失調症をもつ長期入院患者に対してこれを援用し、患者が地域で生活するのに必要なストレングスを入院中から患者と一緒に探り、引き出し、患者自身が選択して活用・発揮できることを促進する看護援助の解明を目指す。この看護援助の解明は、精神科病棟に勤務する看護職員にとっては長期入院患者に潜在している能力を発見する機会となり、また患者にとっては自分の力を認識する機会となる。これにより、これまで精神障害の重さや周囲の環境などの理由によって地域生活が困難とみなされていた長期入院患者が、地域で生活するのに必要な社会資源や機会、援助者などの外的ストレングスを入院中から自身で選択して活用し、内在するストレングスを発揮しながら地域生活への移行を促進できる可能性が期待できる。

本研究の目的は、統合失調症をもつ長期入院患者が希望する地域生活への移行過程において直面した課題を達成するために活用・発揮したストレングス、および対象者がストレングスを活用・発揮できるために有用な看護援助を明らかにす

ることである。

研究 1 では、Rapp ら（2006，2008)のストレングスモデルと Saleebey (2009)のストレングス視点のケースマネジメント理論を用いて、統合失調症をもつ人のストレングスに焦点を当てた援助を検討し、この結果と先行文献を検討して、援助の方針を導くための枠組みと看護援助の指針を作成した。

研究 2 では、対象者に看護援助の指針に基づいて援助を実施し、その援助場面を質的帰納的に分析し、希望する地域生活への移行過程において直面した課題を達成するために活用・発揮したストレングスと、対象者がストレングスを活用・発揮できるために有用な看護援助を抽出した。

本研究の目的は、統合失調症をもつ長期入院患者が希望する地域生活への移行過程において直面した課題を達成するために活用・発揮したストレングス、および対象者がストレングスを活用・発揮できるために有用な看護援助を明らかにすることである。

研究 1 では、Rapp ら（2006，2008)のストレングスモデルと Saleebey (2009)のストレングス視点のケースマネジメント理論を用いて、統合失調症をもつ人のストレングスに焦点を当てた援助を検討し、この結果と先行文献を検討して、援助の方針を導くための枠組みと看護援助の指針を作成した。

研究 2 では、対象者に看護援助の指針に基づいて援助を実施し、その援助場面を質的帰納的に分析し、希望する地域生活への移行過程において直面した課題を達成するために活用・発揮したストレングスと、対象者がストレングスを活用・発揮できるために有用な看護援助を抽出した。

その結果、援助を実施して地域に退院した成人期の女性 4 名、男性 1 名が 4 ヶ月以上の地域生活を継続した。

対象者 5 名の希望する地域生活への移行過程において直面した課題を達成するために活用・発揮したストレングは、【多様な課題に直面しながらも地域生活移行を希求する意思】【これまでの成功･失敗にもとづく自分が取り組めることの自覚】【生活環境の現実を受け止め、その中で精神の安定を図ろうとする意識】【対人関係の苦手さによる孤立やストレスの増大を防ぐための周囲の人との良好な関係の構築】であった。

対象者 5 名のストレングスを活用・発揮できるために有用な看護援助は、失敗の体験に対する看護援助、家族の傷つきに対する看護援助、単身生活の準備期間

に家族と適切な距離を取りながら必要な協力を求めるための看護援助、不安に対する看護援助、疲労と症状のマネジメントに対する看護援助であり、各看護援助には、経験による気づきの促しあるいは強化、対象者が取り組めることの細分化と段階的な計画提案、生活を支える地域における協力者の開拓と調整が含まれていた。

このストレングスを活用・発揮できるための看護援助では、成功体験も失敗体験も次に活かす貴重な機会としてとらえ、対象者の経験、思考、意思、行動をすべて肯定的に受け入れて支持した内容であり、対象者が退院後の生活を 4 カ月以上継続できていることから、このストレングスに焦点を当てた看護援助は、長期入院中の統合失調症患者の希望する地域生活に向けた看護援助として有用であった。